

## 第3回専門セミナー 「成人期を見通した学童保育専門職のしごと」を開催!

- 第1回 「『困った子』の本当の願い～発達の障がいにも視野を広げて」  
6月21日(日) 「『困った子』のことを話し合いながら、支援を考えよう～質問と交流のコーナー」  
講師 白石 正久(龍谷大学教授)
- 第2回 「学童期の生活・遊び・学力～9・10歳の壁に焦点をあてて」(その1)  
7月5日(日) 「学童期の生活・遊び・学力～9・10歳の壁に焦点をあてて」(その2)  
講師 川地 亜弥子氏(大阪電気通信大学准教授)
- 第3回 「働きながらの子育てを支える学童保育の役割と課題～子どもと大人の集団づくりを考える～」(その1)  
7月19日(日) 「働きながらの子育てを支える学童保育の役割と課題～子どもと大人の集団づくりを考える～」(その2)  
講師 池添 素氏(らく相談室主宰)



2009年度前期専門セミナーは、昨年に引き続き学童保育に携わる専門職を対象に「成人期を見通した学童保育専門職の仕事」と題して、3日間の連続講座を開講しました。各日、滋賀県の学童保育で実際に働いている指導員を中心に約50人が熱心に学びました。



第1回は、白石本学教授より、「『困った子』の本当の願い～発達の障がいにも視野を広げて」というテーマでお話をいただきました。目の前の子どもの状態を通して、大人のくらしや問題の背景となる社会の仕組みにも考えるべき問題があることを学ぶことができた講座でした。第2回は、川地亜弥子氏から、「学童期の生活・遊び・学力」というテーマで、とくに9・10歳の壁に焦点をあてて講義をいただきました。9・10歳の壁をどう乗り越えるかは現場でも大きな課題です。川地氏の講義ではとくに「社会性の面での発達」という点から大きな示唆をいただきました。つづく、第3回は、池添素氏に「働きながらの子育てを支える学童保育の役割と課題」について講義をしていただきました。子どもの集団づくりとともに大人の集団づくりも大きな課題です。



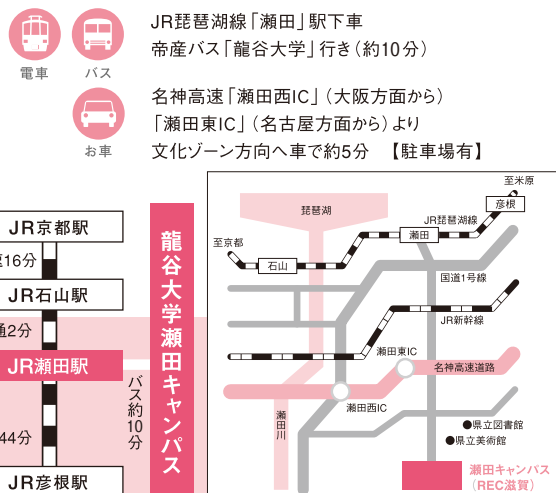
日頃、目の前の仕事や生活に追われている中、自分や子ども達の置かれている客観的状況を学び、実践の展望を切りひらくよい機会を得ることができたと思います。

### 参加者の感想

- 子どものことが更に「大切な存在だ」と感じることができ、明日からの保育への支えが太くなりました。
- 子どもを見る目が社会の変化によって息苦しくなっていること。それが、子どもたちに同様な生き辛さを与えていることが実感できました。子どもたちの放課後の時間の大切さ、充実できる関係、時間作りが何より必要だと思いました。子どもが何を願っているかに気づける関わりをして、共に成長していきたいです。
- 私自身、働きながら子育てをやってきました。周りの人たちに支えられ、助けてもらってやってきました。子育ては一人ではできない。でも、子育てをやっている時は自分で精一杯で、周りの支えが目に入らなかったように思います。今日のお話を聞いて、これから子育てを支援する立場で指導員として支える側になる時の必要なお話をもらったように思います。

### お問い合わせ

龍谷大学福祉フォーラム事務局(REC滋賀内)  
〒520-2194 滋賀県大津市瀬田大江町横谷1-5  
TEL/077-543-7744 FAX/077-543-7771  
E-mail/r-fukushi@ad.ryukoku.ac.jp  
ホームページ/http://rec.seta.ryukoku.ac.jp/fukushi/



# 福祉フォーラム通信

Vol.8

発行日:2010年1月8日  
発行元:龍谷大学福祉フォーラム

## 第5回共生塾「輝け生命、孤立からのネットワーク」を開催!

### 第1回 6月27日(土) 「生命を守る地域づくり」



講師 高橋 典成氏  
(特定非営利活動法人 輝け「いのち」ネットワーク代表)

### 第2回 7月4日(土) 「自殺の実態と予防の課題」



講師 山口 和浩氏  
(特定非営利活動法人 自死遺族支援ネットワークRe代表)

第5回共生塾は「輝け生命、孤立からのネットワーク」と題して、6月27日、7月4日に、それぞれ約30人の参加者のもとで開かれました。

「生命を守る地域づくり」(高橋典成氏・写真左上)では、老人医療・乳幼児医療の無料化を全国に先駆けて実施した岩手県・旧沢内村(現・西和賀町)の「生命が輝くまちづくり」の実践が報告されました。「生命行政」の歴史は、まちづくりの理念に「ひとの生命に格差があってはならない」をうたっていることに生きています。現代における社会的孤立に挑戦し、町内会・自治会、地元大学、社会福祉法人と連携しています。豊かな自然とひとのぬくもりを生かした文化で児童養護施設の虐待体験を持つ子どもたちに「人肌のぬくもり」で「ありがとう」「ごめんなさい」を言える「社会関係」の重さを育てています。当日上映した映画「いのちの作法」は現代におけるスローライフを語りかける「生命讃歌」ともいえるかもしれません。

「自殺の実態と予防の課題」(山口和浩氏・写真右上)では、自殺者が年間3万人を初めて超えた要因に、1997年の決算期(1998年ショック)における金融危機、倒産、失業等の社会的背景があったことがあげられました。自殺は深刻ではあるが、予防可能な社会問題であり、自殺の現状を理解し、危機要因に対応できれば克服できる問題です。『自殺実態白書2008』の概要を説明し、自殺の危機経路、相談状況の分析を行ったうえで、遺児のこころの痛み、こころのケア、生活支援メニューというように、遺族に配慮した対応のポイントを実践的に訴えました。この講演で「安心して悲しめる。弱音をはける社会の構築」が最後にありました。現代における社会的孤立の実際に関心を持ち、そこから共生、ネットワークへの方向をどう切り開いていくか。第5回共生塾は今後のフォーラムの在り方を考える上で大事な課題を提起し、参加者アンケートの評価も高いものがありました。

### 参加者の感想

- とても興味深いお話でした。沢内村という一つの村で起こった事例を通し、問題提起から解決に至るまで、そしてそこから更に発達した活動内容を考え実行するというのは一筋縄ではいかないはずなのに、ただただ感心するばかりでした。
- いつも参加できることを楽しみにしています。毎回元気をもらえる内容で、聞き終わった後も色々と考えさせられています。
- 生きていることの喜びを親子、周りの人々に伝えられたら、と思います。心に響きました。
- 現代社会の構造は、さらに自殺予備群を生んでいるので、社会問題と位置づけ、もっと早く大きく社会と個人が急いで対応をしないといけないと思います。

# 龍谷大学福祉フォーラム2009を開催！ 「身近でつくる共生～糸賀一雄がめざした社会～」

福祉フォーラム2009を10月3日(土)午後、瀬田学舎で開催しました。今年のテーマは「身近でつくる共生～糸賀一雄がめざした社会」とし、元第一びわこ学園園長・高谷清氏の講演につづき、シンポジウムでは障がい者の権利擁護活動に取り組まれている弁護士の土井裕明氏の基調講演、援助者の立場から溝口弘氏と家族の立場から高阪正枝氏の提言に耳を傾けました。参加者は本会の会員および福祉関係職の方、本学学生を含めて約160人となり、身近なところでの共生の実現に向けて心うごかされる会となりました。

## 講演 「現代に生きる糸賀一雄の思想」

講師 高谷 清 氏(元第一びわこ学園園長、小児科医)

滋賀県は知的障がい者福祉の先駆県といわれますが、その礎となったのが糸賀一雄の思想と実践でした。高谷氏は、びわこ学園での実践を通して、『異質の光—糸賀一雄の魂と思想』(大月書店・2005年)ほか多数の書物を著し、糸賀一雄の思想をわたしたちに示してこられました。高谷氏の語りは静かで、いくつもの時代を生きてきた人びとへの敬愛と共感に満ちていました。

糸賀は1914年(大正3年)、鳥取市に生まれ、幼い心に孤独感をたたえた少年であったとのこと。松江高校(現島根大学)時代は、いかに生きるかに悩み、京都大学文学部で宗教哲学を学び、小学校代用教員を経て、滋賀県に勤務。第二次世界大戦後、病氣療養中に池田太郎、田村一二との語らいをとおして、1946年近江学園創設に至りました。

当初は知的障がい児と戦災孤児を同じ仲間として迎え、「温かく、楽しい、そして腹のくちくなる家庭」をめざして、自らも4人の子どもと妻を連れて学園に移り住んだといえます。

近江学園の子どもたちの生きる姿、成長しようとする姿に糸賀は「世の光」を見、発達保障の原理を生みだしました。重症心身障がい児との実践を西ドイツのベーターにも学び、人間と人間の「人格的關係」、つまり、「他者実現とともにある自己実現」の思想と実践をうちだしたのでした。大津市での講演中に54歳の若さで倒れた糸賀の最後のことは、「この子らに」ではなく「この子らを…(世の光に)」でした。糸賀からバトンを渡された人びとは、どのように考え、行動してきたのでしょうか。

講演の中で、1987年、「抱きしめてBIWAKO」の写真集から一部が紹介されました。それは重症心身障がい児施設の新築移転費用を工面するための企画で、参加者は26万人にものぼりました。夕暮れまで手をつないだ人びとのシルエット、湖岸の風に草がゆれて、今日もいのちの光が輝いていることを思いました。

## シンポジウム 「『この人たちを地域の光に』～障がいをもつ人の暮らしを支えるために～」

### 基調講演 「障がい者がねらわれている」

講師 土井 裕明 氏(弁護士)

滋賀県内で発生した知的障がい者雇用工場での虐待、「障害基礎年金」の横領など、障がいをもつ人が危険にさらされています。土井氏によると、弁護士会の中につくられた人権侵害対策委員会で相談に応じた問題には、デート商法、出会い系サイト、ホストクラブなどにまつわる事件が多いのが現状です。今日、軽度の知的障がいや精神障がいを持つ人びとが地域で暮らすようになり、社会的接触の機会が増えてきています。彼らは、計算が苦手だけでなく、騙されても相手を悪い人と思わず、「友達が困っている。助けてあげなくては」と信じていることもわかってきました。被害にあった人を支援する体制とともに、この人たちが被害にあわなくてすむ社会をつくらなくてはならない、と力をこめて話されました。



### シンポジスト

援助者の立場から…講師 溝口 弘 氏(株式会社なんてん共働サービス代表取締役、第12回糸賀一雄記念賞受賞)

溝口氏は、「これまで援助をしてきたけれど、わかり合うのはむずかしい。つらいなあ、うまくいっていないなあ、ひどいことをしているなあと思ってきました」と語りだされました。それは、実践者、援助者としてのおごりを感じさせない、内に向かう声のようでした。大学卒業後2年目に田村一二の一麦寮にはいり、中重度の人たちの落ち穂察を経て、なんてん共働サービスをたちあげ、水平の関係をめざして、作業所としてではなく株式会社として運営されています。

その思想的基盤は、糸賀の「どんなに障がいが高くても主体的、社会的に生きていく権利の実現」、田村の「共に、水平に」の思想、そして池田の「共育、共感、仕事を持って暮らす」にあると話されました。地域の力がなえないように、障がいをもつ人たちは「もっと地域に迷惑をかけるべき」だとも言われました。そのためには家族も市民も私たちも、困って、相談しあう力が大切なのだ。

### シンポジスト

家族の立場から…講師 高阪 正枝 氏(当事者ご家族、作家)

高阪氏は、自閉症の息子さんの子育ての時期から思春期をへて自立への道を、マンガとエッセーによる2冊の本にまとめられました。

高阪氏はご自身が参加された在宅障がい児の主たる介護者の健康実態調査(2009)から、介護者の就労は増えていない、健康状態は改善されていない、相談支援事業を充実させてほしい、自立支援法の導入後手続きがはげつで困っている、などの実態を報告され、とくに自由記述欄から介護者の声をていねいに紹介されました。「親同士でもわかりあうのはむずかしい現状があるが、障がいをこえて互いにわかりあえることが望ましい。親同士が信頼できたときに子どもを信頼することができる。親の力で社会の支援を引き上げていきたい」と力強く述べ、障がいを持つ人と接して「学びあい」、「どうしようかと相談しあう」関係が大切だと話されました。

### 参加者の感想

- 支援のための制度、方法論を学んでいる中では見えにくい、生きた話をお聞きする事ができました。特に高阪さんのお話には、「なるほど」とうなずく点が多かったです。障がいを持つ子どもの学校以外の居場所、親同士が障がいを超えてつながること…。多少現場に関わり、親御さんとも関わっているが、見えていない、見ていなかったところに、そんなニーズがあったのかと驚いてばかりでした。シンポジウムの方のお話は、それぞれ非常に示唆に富んでいました。勉強になりました。
- いろんな方向からの話が聞けたので、勉強になりました。話でもあったように障がい者の方達が安心して暮らせるようになった時に、みんなが安心して暮らせる社会になるのだと思います。将来どのような社会にしていかが本当に大切だな、と思いました。
- 糸賀一雄先生の事は知っていましたが、先生の生い立ち、思想を知る機会がなかったので、すごく良かったです。
- 糸賀さんの思想、そしてそれが今日の福祉のあり方、また福祉従事者の考え方にとどれだけ大きい影響を与えるほどのものだったのか、がとてもよく理解できました。後半では、実際の事例、現場の状況、当事者の声などが聞けて良かったです。
- 学生時代、「共生」はステキな言葉だな、と思っていました。実際、地域生活支援を始め、共生というより共存、生々しい人間同士の付き合いだと痛感しました。その中で改めて、目をそむけず共生をめざしていくきっかけをたくさんいただきました。
- 「この子らを世の光に」という気持ちが、少しでも多くの人々の中に生まれてくるのが大切なのだとも私も生徒に伝えていきたい、と思いました。